

受験生から見た東北大学工学部の AO 入試

倉元直樹 (東北大学高等教育開発推進センター)・
山口正洋・川又政征 (東北大学大学院工学研究科)

東北大学工学部 AO 入試 (Ⅱ期・Ⅲ期) では、平成 14 (2002) 年度Ⅲ期から受験者アンケートを実施している。その時々懸案事項に対する意見収集が主目的だが、経年的な変化も分析可能である。東北地方の受験者にとってオープンキャンパス、東北以外の受験者にとって工学部ホームページが広報として有効に機能していることが確認された。一方、大学のアドミッションポリシーや選抜資料の機能と受験生との意識のズレも見出された。

1. はじめに

東北大学の AO 入試は平成 18 (2006) 年度で 7 回目になる。歯、工 2 学部でスタートした (倉元・奥野, 2001) が、平成 18 (2006) 年度は全 10 学部 11 学科のうち歯、工、理、法、経済の 5 学部が AO 入試を実施した。次年度以降も実施学部が増える見込みである²⁾。一般入試の後期日程廃止といった外的要因の影響 (例えば、倉元・西郡・佐藤・森田, 2006) もあるが、現時点で学内には「AO 入試は失敗」という認識はないようだ。「研究中心大学」という東北大学の使命、「指導的人材の養成」という教育目標に基づき、高校教育で培われる基礎学力を大切にする「学力重視」、かつ、東北大学でやりたいことが明確にあるという「強い意欲 (= 第 1 志望)」を持つ志願者をターゲットとした選抜を全体のアドミッション・ポリシーとしたことで、選抜の実施それ自体に甚大な精力とコストを注入しなくとも、全体としてある程度の結果を残したと評価されている所以であろう。

学部新入生を対象とした調査によれば、オープンキャンパス³⁾の参加経験者は未経験者と比較して、AO 入試から受験する割合が格段に高い (鈴木・夏目・倉元, 2003)。AO 入試で不合格になりながら最終的に合格した者は、平成 16 (2004) 年度に 100 名を超えた (木村・倉元, 2006)。特別な対象ではなく、通常の高校新卒者・過年度者向けの AO 入試 (Ⅱ期, Ⅲ期) の募集人員 (平成 17 [2005] 年度時点) が 242 名、

合格者総数 269 名、志願者総数 640 名程度であることを鑑みると、高率である。換言すれば、「AO 入試で求める学生像」を一般入試と別に設定せずに、オープンキャンパスを中心とした入試広報で志願者予備軍の進学動機を喚起し、AO 入試を彼らにとって「特別に用意されたもう 1 つのチャレンジ機会」と位置づけることで、一般入試に劣らぬ水準の競争選抜とする狙いに成功していると推測できる。

東北大学の AO 入試に先鞭をつけた工学部は、平成 18 (2006) 年度でⅡ期 75 名、Ⅲ期 100 名と全募集人員 810 名の 21.6% を割いている。平成 19 (2007) 年度からは後期日程廃止に伴いⅡ期 90 名、Ⅲ期 115 名の募集人員となり、全体の 25.3% にまで比率が高まる。選抜方法と広報に関しては、平成 2 (1990) 年度からの推薦入学を改廃して AO 入試に切り替えた最初の方式に年々改良を加え (倉元・末永, 2003)、4 度目となる平成 15 (2003) 年度入試で現行方式をほぼ定着させた。その間、様々な情報源から改善点を模索してきたが、その 1 つが本稿の受験者対象アンケートである。推薦時代から、面接終了後に受験者を別室に一時期待機させ、担当教員がクールダウン目的の事後面接を行ってきた。茶菓を交えた雑談を通じて受験の感想等を聞くもので、選抜には無関係である。その機会を利用して平成 14 (2002) 年度の AO 入試Ⅲ期からアンケートが導入された。その時の懸案事項に関する意見収集を目的で、Ⅱ期、Ⅲ期で設

問項目の内容や回答形式に統一性はなく、年度による改変もある。導入時点ではⅡ期の志願者増加対策として地方会場設置が議論されていた。また、Ⅲ期の面接方法、第1次選抜の是非等が懸案事項となっており、それが調査の中心課題であった。それに付随的な関心事項が加わり、全体では4～6頁、多数の項目が含まれる。

本研究では、年度によってほぼ一貫した項目を中心に、そこから東北大学工学部AO入試受験者の意見や態度、入試広報の影響等に関して分析を行い、先述したAO入試の狙いの成否について間接的に検証することを目的とする。

2. 東北大学AO入試Ⅱ期、Ⅲ期(工学部)における選抜方法、入試広報

工学部のAO入試の実施方法は選抜要項、募集要項に記載されている通りである。倉元・末永(2003)、木村・倉元(2006)にもその概要、改良の経緯やその狙いが要約されている。ここでは主に平成18(2006)年度の概要を述べる。

AOⅡ期(工学部)は卒業見込み者(現役)を対象とした区分で、募集人員は75名である。10月下旬に出願、11月下旬に選考、11月末頃に合格発表を行う。調査書、志願理由書、志願者評価書、活動報告書の書類によって第1次選考⁴⁾を実施、合格者に第2次選考で英文の科学論文に関する出題、数学・物理・化学の分野から2問選択する「小論文試験」、および、面接試問を行って合否を決定する。倍率は2倍前後である。AOⅢ期(工学部)の募集人員は100名、現役に加えて既卒者(浪人)も対象とする。センター試験後に出願、2月中旬に選考、2～3日後に合格発表と忙しい。大学入試センター試験の成績、および、調査書、志願理由書、志願者評価書の書類によって第1次選考⁵⁾を実施、合格者に第2次選考で英文の科学論文に関する「小論文試験」、および、面接試問を行って合否を決定する。倍率は平成15(2003)年度までは2倍強であったが、最近では3倍前後である。

通常の入試広報活動以外にAO入試に特化した入試広報活動も行われている。全学では、初

年度から作成している小論文試験問題冊子⁶⁾、導入後3年間作成した全学版AO入試パンフレットがある。工学部独自には平成15(2003)年度から工学部AO入試の紹介パンフレットを作成してオープンキャンパス等で配布している。

3. 方法

3.1. 調査票

調査票は、入試区分、年度毎の項目の対応関係が複雑なので割愛する。基本的にⅡ期は5段階、Ⅲ期は4段階評定である。尺度の最大値を100、最小値を0に線型変換して表示する。

先述の通り、面接後の懇談時に自筆で記入を求めた。無記名であり、回答者の特定は出来ない。記入済の調査票はその場で回収している。

3.2. 調査対象者

AOⅡ期は平成15(2003)～17(2005)年度、Ⅲ期は平成14(2002)～17(2005)年度の面接受験者、すなわち、AOⅡ期では志願者全員、Ⅲ期は第1次選抜合格者が対象となった。調査対象者のプロフィールを表1に示す。若干の回収漏れがあるが、ほぼ全員がアンケート調査に応じている。無記名のため、合否は不明である。

4. 結果

4.1. 調査対象者プロフィール

Ⅱ期の回答者は全員現役、男子78.7%、東北出身72.2%である。Ⅲ期の回答者は現役65.6%、男子88.3%、東北出身65.6%である。全体的に「東北出身」、「男子」の傾向が強いが、前者はⅡ期、後者はⅢ期により強く現れている。なお、性別、現浪、出身地とも大学の公式記録と一致しない場合もある。入試の場での調査であり、合否への影響を恐れて、個人の特定につながる項目を正確に記入しないケースや、「地域」の境界に部分的な曖昧さがあったかもしれない。Ⅱ期では志願を決めた時期を尋ねた。1年生時点38名(7.7%)、2年生129名(26.2%)、3年生が325名(66.1%)である。Ⅲ期の現役生のうち、

受験生から見た東北大学工学部のAO入試

Ⅱ期も受験した者⁷⁾は33名(現役受験生の7.1%),各年度4~14名であった。AO入試に関する印象は押しなべてよく、「AO入試を受験

して良かった」の平均がⅡ期で93.0,Ⅲ期で90.3⁸⁾、「後輩にも受験を勧めたい」がⅡ期で85.6,Ⅲ期で86.7であった。

表1. 調査対象者プロフィール

年度・区分	受験者数	1次合格	データ数	合格者数	性別		現浪		出身地域										
					男	女	現	浪	北海道	東北	北関東	南関東	甲信越	東海	北陸	関西	中国	四国	九州
H15Ⅱ期	169	169	169	76	140	29	169	-	1	113	11	9	5	6	1	5	2	2	5
H16Ⅱ期	144	144	144	76	112	31	144	-	2	93	12	9	5	2	0	5	3	3	7
H17Ⅱ期	183	183	181	87	136	45	181	-	3	111	11	16	11	2	3	4	7	4	6
Ⅱ期合計	496	496	494	239	388	105	494	-	6	317	34	34	21	10	4	14	12	9	18
H14Ⅲ期	228	197	196	104	175	21	128	68	4	128	15	8	10	7	3	5	8	2	5
H15Ⅲ期	216	156	155	103	134	21	95	60	2	106	11	5	4	6	5	3	4	2	2
H16Ⅲ期	315	170	169	113	153	16	97	72	5	110	16	14	8	3	6	4	0	0	3
H17Ⅲ期	279	197	197	112	169	26	149	46	2	120	31	7	6	8	7	4	5	1	2
Ⅲ期合計	1,035	720	717	432	631	84	469	246	13	464	73	34	28	24	21	16	17	5	12

4.2. 地方会場, 第1次選抜, 面接方法

地方会場の設置に関しては「仙台で受験したい」の平均が83.8(東北以外でも75.0),「是非,地方会場で受験したい」は21.7(同28.2)で,平成17(2005)年度からは調査から除かれた。Ⅲ期は調査の導入時点で「個人面接」と「集団面接」が混在していたが,一部に憶測を呼んでおり,全受験者への面接方法の統一が懸案であった。平成14(2002)年度の87.2%が「個人面接」を希望し,翌年から「個人面接」に統一された。その分,第1次選抜を厳しく行うことになったが,「合格可能性が高い者に限定やむなし」が82.0,「一般選抜準備を考えれば不合格は本人のため」⁹⁾が72.9,「合否が早期判明す

るため,かえって受験しやすい」¹⁰⁾が75.2と支持されており,「全員受験させるべき」は27.1に止まった。ただし,「もっと合格可能性の高い者に限定すべき」は40.8と賛否相半ばである。

4.3. 受験した理由, しなかった理由

「AO入試を受験した理由」に関する回答結果を表2に示す。Ⅱ期では,「東北大学工学部でやりたいことがある」という理由が平均97.8で,100に近い。次いで「学力以外の面を評価してもらえ」ことが大きな理由となっている。「自分をアピールできる」も含め,活動報告書,面接等の選抜方法によるところが大きい。

表2. 受験した理由(平均値)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
Ⅱ期	97.8	91.1	90.4	84.6	81.6	74.4	73.9	-	55.1	40.8	37.8	32.6	26.1
Ⅲ期	-	-	79.5	87.2	-	-	74.0	67.4	-	42.2	-	36.5	-

1: やりたいことがある, 2: 学力以外の面を評価してもらえ, 3: 自分をアピールできる,
 4: 受験機会が増える, 5: 大学での勉強準備を早く始めたい, 6: 入学前教育を受けたい,
 7: 求められる能力・資質を満たしている, 8: センター試験が取れた, 9: 受験勉強から早く解放されたい,
 10: 一般選抜より合格容易, 11: Ⅱ期が最優秀と聞いた, 12: 先生などに勧められた, 13: センターが不要

表 3. II期を受験しなかった理由 (平均値)

	1*	2*	3	4*	5	6	7	8*	9	10
全体	46.0	37.3	33.7	30.9	29.8	27.4	26.9	23.6	12.0	11.2
東北	49.0	43.2	32.0	35.4	29.9	26.8	28.9	16.7	11.3	11.5
東北以外	40.9	26.7	37.1	22.3	28.4	29.1	23.5	36.1	13.6	10.6

1: 合格しそうになかった, 2: 合否見極めつきにくい, 3: 評定が基準未満, 4: III期 / 一般の準備の妨げ, 5: 試験時期が早すぎる, 6: 求められる能力・資質と合わない, 7: 志望が固まっていなかった, 8: II期の存在を知らなかった, 9: 学校の先生に止められた, 10: 受験しにくい雰囲気为学校にあった

*: 地域差あり (p < .05)

「受験勉強から早く解放されたい」という理由も 50 を超えたが「大学での勉強の準備を早く始めたい」という理由に及ばない。「一般選抜より合格しやすい」、「先生などに勧められた」は相対的に小さく、「センター試験を受けなくてよい」という項目の平均値が最も低かった。

年度差が見られたのは「受験機会が増える」で、平成 17 (2005) 年度が前年度より平均値が大きい¹⁰⁾ (H17: 88.1 > H16: 79.7)。また、「II期が最も優秀と聞いたから」という理由は年々上がっている。平成 16 (2004) 年度以降と前年度に差がある (H17: 43.3, H16: 41.3 > H15: 28.9)。地域差は見られなかった。

志願を決めた時期によって差が見られたのは「入学前教育¹²⁾を受けたいから」という理由である。1年生で志願を決めた者の平均は 85.4, 2年生が 75.8, 3年生が 72.7 で、1年生と3年生の間に差があった。

III期は項目の構成と表現が違うが、「受験機会が増える」ことが最も値が大きいという特徴がある。回答者の属性によって違いが見られたのは「センター試験の成績が良かった」で、年度 (H14~H17) × 地域 (東北, 東北以外) × 現浪の 3 元配置の分散分析で、年度 (H16: 77.8, H17: 73.4 > H14: 59.0, H15: 58.9), 地域 (東北: 69.9 > 東北以外: 62.6) に差があり, 交互作用もあった (図 1 参照)。「先生等に勧められた」にも地域差 (東北: 42.7 > 東北以外: 25.2), 現浪差 (現役: 41.5 > 浪人: 27.4) があった。

III期の現役生でII期を受験しなかった者

(n=429) が挙げた理由は表 3 に示すとおりである。全体として数値が小さく、判然としないが、「合格しそうになかった」、「合否の見極めが難しかった」という理由が、相対的に高い。学校から受験を止められたわけではなさそうである。地域差があったのはこの 2 つのほかに「III期や一般入試の準備の妨げになる」という理由で、東北地方の値が高かった。「II期の存在を知らなかった」のは東北以外が高かった。

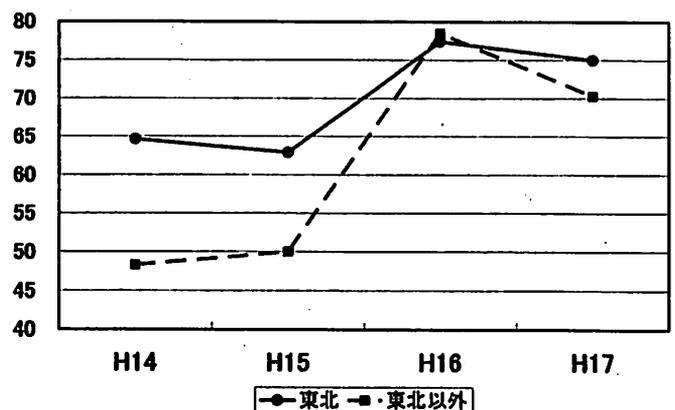


図 1. センター試験の成績が良かった (III期)

4.4. 合否の決め手

II期では「もし、あなたが合格したら、何が評価された結果だと思うか」という質問を行った。結果を表 4 に示す。「志願理由書」の値が最も大きく、「小論文」は共通問題 (英文), 選択問題 (理数系) とともに重視されていない。

年度差が見られたのは「小論文 (選択)」で、平成 16, 17 (2004, 05) 年度と平成 15 (2003) 年度の間に差があった (H17: 49.4, H16: 54.8

> H15: 38.7)。地域差はなかった。志願を決めた時期で差が見られたのは「調査書(学業)」と「面接」である。1年生で志願を決めた者の平

均がそれぞれ81.6, 80.3, 2年生が69.8, 71.6, 3年生が69.3, 67.6で、いずれも1年生と3年生の間に差があった。

表4. 合否の決め手(Ⅱ期のみ, 平均値)

志願理由書	調査書(活動)	調査書(学業)	面接	活動報告書	小論文(共通)	小論文(選択)
74.8	70.5	70.3	69.7	67.1	55.1	47.3

4.5. 入試広報の影響力

表5に、それぞれの入試広報資料に触れた経験がある割合¹³⁾を示す。Ⅱ期の受験者のほとんどは「1: 工学部のホームページ」, 「2: 大学案内」, 「3: 過去問」等への接触経験がある。「5: オープンキャンパス」の参加経験者も75%近くである。Ⅲ期はⅡ期に比べると、概して広報資料の接触経験者の割合は低くなっている。Ⅲ期が大きく上回っているのは「9: 受験雑誌」等の記事¹⁴⁾である。Ⅱ期とⅢ期で著しく大きな違いが見られたのは「3: 過去問」である。Ⅱ期の90%以上が目にしたことがあるのに対し、Ⅲ期

では43.9%にすぎない。広報資料へのアクセスには地域差も見られる。Ⅱ期, Ⅲ期の双方で東北地方の出身者の接触率が有意に高いのは「5: オープンキャンパス」, 「10: 出前講義」, 「11: 東北大学見学」, 「13: 学校外での進路説明会」である。Ⅱ期だけに差がある項目は「3: 過去問」, 「12: 学校外での東北大学の先生の講演」である。それに対して、東北以外の出身者の接触率が高いのは、「1: 工学部のホームページ(Ⅱ期のみ)」, 「7: アドミッションセンターのホームページ」, 「9: 受験雑誌の記事」である。

表5. 広報資料に触れた経験がある割合(%)

	1	2	3	4	5	6 [#]	7 [#]	8	9	10	11	12	13	14 [#]	15 [#]	
Ⅱ期	全体	95.3	95.1	91.3	80.5	74.8	65.2	64.2	57.3	37.9	31.4	20.1	15.8	14.8	14.8	11.7
	東北	94.0	94.3	94.0	82.6	87.3	65.8	58.9	56.3	31.5	44.0	27.2	20.6	18.0	13.6	9.8
	東北以外	98.1	96.3	85.7	75.8	50.0	64.4	75.2	56.5	49.4	6.8	5.0	6.8	8.0	16.0	14.2
Ⅲ期	全体	88.9	94.1	43.9	81.4	62.5	-	52.7	-	59.6	24.7	20.8	-	14.8	-	-
	東北	87.2	92.8	47.6	82.2	78.7	-	43.8	-	56.9	32.4	27.9	-	19.2	-	-
	東北以外	91.7	96.3	38.0	80.3	32.6	-	69.5	-	65.1	9.9	8.3	-	6.6	-	-

1: 工学部ホームページ, 2: 大学案内, 3: AO入試過去問, 4: 工学部案内パンフ, 5: オープンキャンパス, 6: AO入試パンフ(大学), 7: ARCホームページ, 8: AO入試パンフ(工学部), 9: 受験雑誌, 10: 出前講義, 11: 大学見学, 12: 学校外での講演, 13: 学校外での進路説明会, 14: ビデオ(工学部), 15: ビデオ(大学)

*: 現在は作成されていない, イタリック: 地域差あり(下線部の値が高い)($p < .05$)

表6. 広報資料が参考になった程度

	1	2	3	4	5	6 [#]	7 [#]	8	9	10	11	12	13	14 [#]	15 [#]
Ⅱ期	90.1	86.5	83.0	89.9	94.8	87.7	84.9	90.9	82.2	82.4	83.4	81.7	75.0	78.1	71.6
Ⅲ期	81.4	71.4	65.4	76.7	87.1	-	69.0	-	72.2	72.4	80.7	-	66.3	-	-

項目内容は表5注釈を参照のこと。

表6に広報機会が「参考になった(Ⅱ期)・影響を受けた程度(Ⅲ期)」を示す。接触経験が有る広報機会に対しては、概ね肯定的である。Ⅱ期、Ⅲ期とも「5: オープンキャンパス」の評価が高い。最も評価が分かれるのは、「3: 過去問」である。項目の表現も結果に影響しているかもしれない。

なお、Ⅲ期の「9: 受験雑誌の記事」には現浪差(浪人: 75.9 > 現役: 70.3)が見られた。

表7はⅡ期のみ質問である。接触経験がある広報機会の中で「最も役に立ったもの」、接触することが出来なかった広報機会の中で「触れてみたかったもの」を1つ挙げさせた。「触れたかった」の数値は上段が有効回答者全体、下段が未経験者に占める割合である。まず、回答者

のちょうど半数(50.0%)が最も役に立ったとし、参加しなかった者の大半(未経験者中75.7%)が最も触れてみたかったとしたものが「5: オープンキャンパス」である。入試広報としてのオープンキャンパスの重要性がここにも見られる。次に役に立ったものは「1: 工学部のホームページ」である。これに加えて「3: 過去問」がⅡ期受験生にとって最も大切な情報であった。「5: オープンキャンパス」以外では、「10: 出前講義」、「8: 工学部だけのAO入試パンフレット」、「14: 工学部紹介ビデオ」が経験してみたかったものとして上げられる比率が高かった。質問項目にはなかった「16: 東北大学の先生の講義」、「12: 学校外での講演」を加えると、大学の講義に対する関心も高い。

表7. 最も役立ったもの・触れてみたかったもの(Ⅱ期)(%)

	1	2	3	4	5	6 [#]	7 [#]	8	9	10	11	12	13	14 [#]	15 [#]	16	17
Ⅱ期接触経験	95.3	95.1	91.3	80.5	74.8	65.2	64.2	57.3	37.9	31.4	20.1	15.8	14.8	14.8	11.7		
役に立った	22.9	2.2	9.2	4.1	50.0	0.7	0.0	3.1	1.1	2.8	0.9	1.3	0.2	1.3	0.2	-	-
触れたかった	1.4	0.0	2.7	1.4	23.7	0.5	1.1	14.7	1.6	13.6	2.7	7.1	2.7	11.7	4.1	6.5	4.4
未経験者中	31.3	0.0	20.0	7.0	75.7	1.5	2.9	27.6	1.8	18.4	3.1	8.3	2.9	13.4	4.3	-	-

1~15の項目番号は表5注釈を参照のこと。16: 東北大学の先生の講義(場所限定なし)、17: 特になし

5. 考察

高大接続の文脈では、大学入試において、学生の供給サイドである高校側が何を求めているかを具体的に把握することが大切である。その点、地方会場や面接方法、1次選抜の是非等、具体的な意思決定にアンケートが寄与した役割は大きい。無用な障害を取り除いてターゲットとする受験生が受験し易くする工夫は必要であり、そのための適切な情報収集は欠かせない。調査結果を見る限りでは、東北大学工学部が掲げるアドミッションポリシーに沿った志願者が得られている。AO入試の入学者にはミスマッチが少なく、退学率が低く、入学後の学業成績も良い等の効果が得られている理由もここにある。また、早めに志願を決めた層が、大学教育

に先に触れることが出来る「入学前教育」を魅力に感じていたことも分かった。

入試広報とその影響力、受験者の意識・動向との関係では、いくつか興味深い現象が見られた。広報ツールとしては、「オープンキャンパス」と「工学部のホームページ」の圧倒的重要性が示された。ただし、地域性があり、オープンキャンパスは大学に近い東北地方、ホームページは遠い地域からの志願者にとって貴重な情報源となっている。Ⅱ期とⅢ期で大きく違ったのは「過去問」である。小論文試験のウェイトが高いⅡ期と、センター試験のウェイトが高いⅢ期という選抜方法の違いによるものだろう。「受験雑誌の記事」に現浪差が見られたことも併せる

と、広報の対象によって、力点を置く媒体を適切に選択することの重要性が示唆された。

ところで、「AOⅡ期が最優秀」という認識は工学部独自の追跡調査の結果によるもので、近年広報に力を入れているが、AOⅡ期受験者の間には浸透しつつあるようだ。反面、AOⅡ期の「合否の決め手」が小論文にあることは入試データの分析から明らか（木村・倉元，2006）であり、工学部独自のAO入試パンフレット等で周知を図っているが、浸透しない。「志願理由書」等、他の資料が「合否の決め手」と思われている。特に、早期に志願を決めた層は学校の成績と面接を重視しているが、その心情は付度できる。高校で行うべき学習活動に忠実に努力することは、大学として求めていることであり、小論文が決め手という事実と反していても悪いとは言えない。データに現れる事実と受験者の主観とのギャップの解明は、今後の課題と言える。

入試広報の難しさを示す結果も得られた。平成16(2004)年度のAOⅢ期は一気に99名受験者が増えた。センター試験の平均値が下がり、前年度のデータを見て受験した者が多かったことが主因と思われる。平成16(2004)年度から、受験の理由として、「センター試験の成績が良かった」ことが急上昇した。特に情報が少ない東北以外でそれが顕著である。もちろん、合格可能性の判断に参考となる情報を開示してきた努力の成果だが、過度のウェイトが置かれることは趣旨に反する。情報開示をためらうのではなく、それを上回る大学の魅力をどのように作り、伝えていくかが今後も継続する課題と言えよう。

注

- 1) 医学部は平成16(2004)年度から募集を開始した保健学科が医学科とは別の入試組織である。保健学科はさらに3専攻(看護学専攻、放射線技術科学専攻、検査技術科学専攻)で募集単位、入試科目が異なる。
- 2) 平成19(2007)年度から医学部医学科、農学部、平成20(2008)年度から教育学部、医学部保健学科、薬学部が「AOⅢ期」を実施する予定である。
- 3) 7月の連続した最後の平日2日間に実施している。年々参加者が増え、平成18(2006)年度には289台の大型バスが訪れるなど、10学部で延べ約23,000名(独立大学院等を加えると約27,000名)の参加規模と

なった(以上、東北大学教育・学生支援部入試課調べ)。ちなみに、平成18(2006)年度入学者の中でオープンキャンパス経験者は1,107名(45.5%、東北6県各県別では55~77%)、そのうち、オープンキャンパスが「決め手」、「参考」になって進路を決めた者が86.9%である。

- 4) 選抜は形式的なもので、第2次選考の収容能力を超えない限り全員合格とする方針を取っている。書類のみを根拠に不合格の決定を下すことに高校側からの反発が強いことがその理由である。
- 5) Ⅱ期とは異なり合格者を絞り込む。大学入試においては「たとえ不合格になったとしても、…(中略)…その過程をコントロールする機会が多い選抜手続きの方が、不満は少ない(西郡，2006)」と考えられるが、センター試験は「実力の発揮機会」とみなされ、受験者が公正と感じる「過程コントロール」が担保されている。また、合格可能性がほとんどない受験者に対して、時間を無駄にさせたくないという配慮もある。なお、Ⅲ期には活動報告書はない。
- 6) 希望者のみ、学校等を通じて配布。
- 7) Ⅱ期で不合格の者。第1次選抜での不合格者もいるので、再受験者の実数はこれより多いと思われる。
- 8) Ⅱ期は5段階評定、Ⅲ期は4段階評定で、表現も微妙に異なるので単純比較は出来ない。以下同じ。
- 9) 平成15(2003)年度から導入した項目。
- 10) 平成16(2004)年度から導入した項目。
- 11) 「統計的仮説検定で5%水準で有意な程度」が目安。
- 12) 平成14(2002)年度からAOⅡ期合格者のうち希望者を対象に通信教育方式で実施している。大学入学後に履修する「数学物理学演習」を前倒して受講可能としている他、「工学英語」、「自由研修」がある。義務ではないが、合格発表後に行われる入学前教育のガイダンスにはほとんどの合格者が参加している。
- 13) 「評定」ではなく「割合」なので、比較可能である。
- 14) Ⅱ期では「受験雑誌の記事」、Ⅲ期では「受験雑誌等の工学部紹介記事」となっているので、受験者が想起した内容が異なっている可能性もある。

文献

- 木村拓也・倉元直樹，2006，「戦後大学入学選抜制度の変遷と東北大学のAO入試」『東北大学高等教育開発推進センター研究紀要』1: 15-27.
- 倉元直樹・末永智一，2003，「志願者の質の評価 - 東北大学AO入試Ⅱ期(工学部)の例 -」『大学入試研究ジャーナル』13: 11-16.
- 倉元直樹・奥野攻，2001，「平成12年度東北大学歯学部AO入試について」『大学入試研究ジャーナル』11: 43-48.
- 倉元直樹・西郡大・佐藤洋之・森田康夫，2006，「後期日程入試の廃止問題に対する高校教員の意見構造」『東北大学高等教育開発推進センター研究紀要』1: 29-40.
- 西郡大，2006，「日本の大学入学選抜をめぐる公正に関する研究」『東北大学大学院教育情報学教育部修士学位請求論文』
- 鈴木敏明・夏目達也・倉元直樹，2003，「オープンキャンパスとAO入試」『大学入試研究ジャーナル』13: 7-10.